

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520813

研究課題名(和文) 明治維新时期における藩祖神格化の研究

研究課題名(英文) The research of deifying Daimyo's ancestors on Meiji-Ishin period

研究代表者

岸本 覚 (kishimoto, satoru)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：80324995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀中期～19世紀初頭は、武家に限らずさまざまな個人や集団が祖先への崇敬を具体的に形に表した時期である。本研究では、薩摩藩島津家と長州藩毛利家を事例として、明治維新时期の藩祖神格化の特徴を考察した。その結果、西欧文明やキリシタンへの脅威に対抗するかたちで、明治維新时期における藩祖の神格化を進行することが明らかになった。さらに、そこには神仏分離過程および戦没者追悼儀礼など明治政権の宗教政策全体を見渡す視点に関係することも指摘した。

研究成果の概要(英文)：During the mid-18th to early 19th centuries, not only samurai families, but various individuals and groups began showing their reverence for their ancestors in a concrete fashion. In this study, I considered a characteristic of the ancestor of a lord divinization of the Meiji-Ishin period as an example in the Satuma and the Choshu clan. As a result, it was revealed that the apotheosis of the ancestor of a lord in the Meiji Restoration period went in form against the menace to Europe civilization and Christian. I pointed out what a viewpoint to look around the whole religion policy of the Meiji government including separation process of Shinto and Buddhism and the war dead mourning courtesy was related to there.

研究分野：明治維新史

キーワード：藩祖神格化 薩摩藩 長州藩

1. 研究開始当初の背景

(1) 藩祖顕彰研究をめぐる国内的な研究状況

近世期の藩祖顕彰に関わる研究には、武士の神格化について包括的な議論を展開し、「御家」や「藩」についての考察を深めている高野信治が注目される。さらに、こうした武家の歴史意識だけでなく、地域社会を含めた由緒・来歴などの歴史意識の研究(白井哲哉・井上攻・落合延孝・山本英二・岩橋清美等)とあわせて大きな近世後期の政治文化研究の潮流を創り上げてきている。また、近代においては、羽賀祥二『明治維新と宗教』『史蹟論』の問題提起以降、高木博志等に見られるような近代天皇制の文化史的研究や原田敬一『国民軍の神話』・本康宏史『軍都の慰霊空間』の近代の戦没者追悼研究等が、本研究にとって重要な成果として位置づけられる。これらの研究は、^a近世からの連続性を意識しており、^b戦没者の追悼のなかに近代の「宗教」問題を指摘しているからである。

(2) 藩祖顕彰と神仏分離・戦没者追悼との関係

申請者は、今年度終了の科研「幕末・維新期における藩祖顕彰の総合的研究」で、近世後期における藩祖顕彰(藩祖歴史編纂事業・藩祖神格化・藩祖祭祀・藩祖廟形成・戦没者追悼儀礼など)の実態分析を軸に研究を進めてきた。そのなかで幕末期の薩長などの有力大名において、藩祖神格化と戦没者追悼(招魂祭)の問題には、神仏分離過程と極めて強い関わりがあることがわかってきた。現在の科研では、戦没者追悼においては幕末期のみで維新期以降の問題に十分踏み込んでおらず、神仏分離については質および量ともにとてもフォローできる内容ではなく、新規にその課題を追求する必要性が出てきた。さらに、研究対象の時期を明治前期にひろげ明治維新期の地域社会における藩祖神格化および戦没者追悼問題の研究成果(今井昭彦『近代日本の戦死者祭祀』・森岡清美論文等)を踏まえた考察も必要ではないかと考えるようになった。

申請者の研究は、こうした近世から近代にかけての藩祖顕彰研究に関わる成果をつなぐ役割を果たすもので、その際着目しているのが神仏分離と戦没者追悼に関わる問題である。

(3) 当該研究に関わる国際的な研究状況

神仏分離過程については、従来の理論的・実証的な研究を踏まえることは言うまでもないが、James Edward Ketelaar “Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan” Princeton University Press (岡田正彦訳『邪教/殉教の明治』ペリかん社、2006年)の視点は重要である。著者は幕末維新期の排仏政策・廃仏毀釈～明治仏教の成立を「異端」をキーワードに論じており、この視点を活か

すことが幕末維新期の歴史意識研究にも必要であると思われる。さらに、国際的な評価を得てきているフランス革命期におこった非キリスト教化運動研究の方法論の視点も注目したい。例えば、近年の注目すべき研究である Suzanne Desanlthaca “Reclaiming the sacred: lay religion and popular politics in revolutionary France”, N.Y.: Cornell University Press, 1990 (『聖なるものを取り戻す』翻訳なし)は、革命が反革命かという二項対立的な視点ではない「市民宗教」的なあり方の考察は近代日本の「神仏分離」を考えていくうえで重要な指摘がある。

2. 研究の目的

本研究は、明治維新期における戦争状況から版籍奉還・廃藩置県・土族解体という一連の領主制解体過程のなかで、近世後期に顕彰されてきた藩祖等がいかなる位置づけを与えられていくのかをあきらかにすることを目的としている。とくに、申請者が科研のなかで実証していきたく藩祖顕彰の成果を、明治維新期における神仏分離過程および戦争継続にともなう戦没者追悼儀礼と関連させることで、大名家だけでなく明治政権成立期の宗教的・文化的動向を展望することができるのではないかと考えている。さらに、明治初年の藩祖の神格化を求める地域社会(土族・民衆)の動向を、領主制解体のなかで改めてその性格を明らかにしていくものである。

3. 研究の方法

本研究全体の研究計画は、幕末・維新期最大の雄藩であった薩長両藩の神仏分離・戦没者追悼の実態をあきらかにし、明治初期における藩祖の神格化の意義を新たに問い直すことである。そのために、(1)長州・薩摩の両藩の藩祖祭祀の神仏分離過程に関する調査を中心に行う。あわせて、(2)藩祖神格化の思想的な背景を長州藩の山県太華や近藤芳樹の思想関係資料、戦没者追悼(招魂祭)に関わる資料収集・検討を行う。(3)さらに、明治政府の祭祀構築や宗教政策を視野に入れつつ、両藩や九州・中四国地域の土族解体と藩祖神社創建に関わる史料収集をおこなう。なお、(4)変革期の宗教問題を研究するフランス革命史の専門家との意見交換を行いつつ方法論的な工夫を重ね、学会等で研究報告を行い、議論を深めるとともに、研究成果を論文・報告書にまとめていくこととする。

全体として(1)と(2)と(3)の作業を並行して実施し、3年目から関連する(1)(2)を結びつけ、(1)(2)(3)全体の接合は(4)の成果に学びつつ4年目5年目で実施する。

4. 研究成果

本研究の成果は、最終年度に掲載した論文にほぼ集約されている。まず、「近世薩摩藩祖廟と島津重豪」(『アジア遊学』190、特集：島津重豪と薩摩の学問・文化、2015年10月、勉誠出版、127～139頁)には、薩摩藩の藩祖顕彰を島津重豪の時期を中心に展開したものである。おもに担当したのは、鎌倉の藩祖忠久墓所の創出に関わるものである。ただ、収集してきた神仏分離関係の史料を十分にいかしきれていない点は今後の近いうちに発表していきたいと思っている。

次に、長州藩については、報告および論文「明治維新と宗教一転換期長州藩にみる寺社と祭祀」(『山口県史研究』24、2016年3月105 - 126頁)で展開した。本論文は、この科研の成果を反映させたものとなっている。ここでは、藩祖神格化を19世紀全体の枠組みから説明するために、キリシタンに対する大名や武士層の意識を前提に、どのように精神的支柱を確立していこうとしたのかを、藩祖祭祀と招魂祭祀の双方の視点から展開した。2011年度のイギリス調査の成果や鹿児島県の文献調査と実地調査などをいかしながら長州藩をベースに展開したつもりである。

また、諸藩についての論稿も蓄積し、薩長のみならず全体としての動向にも目を向けていったつもりである。鳥取藩領については、鹿野領主であった亀井茲矩の顕彰を地域の視点から展開した論文「旧領主の由緒と年忌 亀井茲矩顕彰における藩と地域」(『歴史評論』743、2012年3月)を作成した。さらに、鳥取藩池田家の祖先顕彰活動として池田冠山の動向に注目した「研究余録 池田家の歴史と地域社会」(『日本歴史』773、2012年10月)がある。こうした藩祖顕彰の動きは、大名だけでなく、さまざまな地域の動向と重なっている。

とくに神仏分離に関わる地域の動向を意識しながら作業を進めた。その際、方法論的な影響を受けたのが、Suzanne Desanlthaca “Reclaiming the sacred : lay religion and popular politics in revolutionary France”, N.Y. : Cornell University Press, 1990 (『聖なるものを取り戻す』翻訳なし)である。革命か反革命かという二項対立的な視点ではない「市民宗教」的なあり方の考察は、新たな祭祀を生み出そうとする日本の「神仏分離」を考えていくうえで重要な指摘がある。成果諸論文は、こうした視点を意識しながら展開した。但し、海外の研究文献の整理にはもう少し時間が必要で、今後も継続的な作業を進めていくつもりである。

この視点をさらに深めていくうえで、最終年度に調査にかかった津和野藩の事例は重要であろう。近代日本の宗教政策の中心的な役割を担った津和野藩の藩主や藩士の動きは、薩長両藩の藩士ともども今後追求していくべきものとして考えている。

以上予定した計画に迫ったものではあったが、いくつか課題も残している。

まず、藩祖神格化と戦没者追悼儀礼の接点を対キリスト教認識のなかであきらかにできたものの、神仏分離との関係は、今後時間をかけて進めていく必要を感じている。そのためには、明治期の史料も含めた19世紀全体の調査分析が求められよう。この点は、東照宮に関わる視点を導入することで今後発展的な議論になると考えられる。

さらに、国際的な視点をしっかりと持つ必要がある。この科研ではフランス革命期の非キリスト教化運動の方法論に学ぶことが多かったが、今後は欧米的な視点だけでなく、東アジアの宗教環境にも目を配りながら展開していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

岸本覚「明治維新と宗教一転換期長州藩にみる寺社と祭祀」(『山口県史研究』24、2016年3月105 - 126頁)

岸本覚「近世薩摩藩祖廟と島津重豪」(『アジア遊学』190、特集：島津重豪と薩摩の学問・文化、2015年10月、勉誠出版、127～139頁)

岸本覚「研究余録 池田家の歴史と地域社会」(『日本歴史』773、2012年10月) pp95 - 104、査読有

岸本覚「旧領主の由緒と年忌 亀井茲矩顕彰における藩と地域」(『歴史評論』743、2012年3月) pp19 - 33、査読有

〔学会発表〕(計 2 件)

岸本覚「幕末の海防と神主 因幡神職の活動から - 」(鳥取地域史研究会、鳥取市福祉文化会館、2014年10月25日)

岸本覚「近世後期の神職の活動 飯田家資料の願書類を中心に」(鳥取地域史研究会、鳥取市福祉文化会館、2013年4月13日)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

岸本覚「津和野のお殿様の神社参りー「百景図」に見る藩祖祭祀」(2016年3月21日、津和野町民センター講義室)

岸本覚「明治維新と宗教 - 転換期長州藩にみる寺社と祭祀 - 」(2015年10月10日、教育会館)

岸本覚「幕末期における毛利家『聖地』 - 毛利隆元の神格化と隆元廟を中心に - 」(2013年9月15日、安芸高田市歴史民俗博物館)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸本 覚 (kishimoto,satoru)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：80324995

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：